

---

# Fate/fantasy volost

真墮男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / f a n t a s y   v o l o s t

### 【Nコード】

N 4 0 4 0 Q

### 【作者名】

真墮男

### 【あらすじ】

——聖杯戦争。

それはマスターと呼ばれる七人の魔術師が、サーヴァントと呼ばれる英霊を呼び出し競い合う殺し合い。あらゆる願いを叶える願望機——聖杯を巡り、今宵歪んだ歯車を回して五度目の聖杯戦争が幕を上げる。

これはF a t eと東方P r o j e c tのクロスです。東方のキャラクターがサーヴァントとして召喚されます。あらかじめご了承ください

だ  
さ  
い。

## Prologue / 1

月が嗤う。闇に浮かぶ三日月が、寝静まる街を照らしていた。人気は失せ、車も通らない冬木大橋。その赤いアーチの色に溶け込むように、風を梳いて佇む紅い騎士が街を見下ろしている。

「収穫はなし。それもそうか、まだ始まってもない」

わずかな不満の色が、漏れ出す声に含まれている。

「だが、違うな。また一体召喚されたか」

風の中に漂う魔力の奔流を感じ取った。

ここ数日、彼女は毎日こうして冬木の街に漂っている魔力を観測している。今この瞬間、その変化の感触を得たのだ。

彼女はサーヴァントである。それも七体の中で重要視される三騎士の一角、ランサー。こと速さに関しては、このクラスの右に出るものはいない。最速のサーヴァントと名高い、槍の騎士。

「神父の話を信じるなら、昨日の時点ではまだ五体。ということは後一体。そいつが召喚されたとき……」

聖杯戦争。七人のマスターとサーヴァントによる殺し合いが始まる。

これから始まる戦いに胸を躍らせて、ランサーの口元が鋭利に歪んだ。

「滾る、滾る、滾る。死んでもなおこれほど心躍ることがあるうとは思わなかった。

ああ、どうしてくれよう。一度失ったはずの体が熱くて熱くて仕方がない。戦わずしてこの熱を鎮めるには……………」

ランサーは苦しむように自分の体を抱く。その身は襲い来るカタルシスによって小刻みに震え、幼い顔に恍惚とした表情が浮かぶ。そうして少しずつ、ランサーの体が透けていった。夜に溶けるように、闇に同化するように。

「——食事をしなくては、ね」

小さな口から覗いた牙が、月の光を反射して鋭く光る。

やがて完全に消えた紅い槍兵は、獲物を探しに夜の街へと降りて行った。

+

月が嗤う。窓から差し込む淡い光は、その穢れきった洋館を浄化

するには足りない。

「っ……」

洋館の一室で霊体化していた少女が、窓からの月明かりに姿をさらした。

その瞳は虚空を見つめ、遠くの何かを探すようにじっと夜空を仰いだ。

「……あと一体、か」

月下の下、間近に迫った事態に眉を寄せて呟いた彼女はライダーのサーヴァントである。

緑の闇の中、ひどく陰湿な場所で召喚されたのがつい先日。えらところ呼び出されたものだ、自分の運のなさを心の底から呪った。

マスターに問題があったわけではない。あったのはその周りだ。召喚場所もそうだが、マスターが兄と言った男も、辺り一面に巣食っていた虫も——そしてなにより、マスターの隣に立っていたあの翁が。

一目見て悪寒がした。二度目見て、三度目見てもそれが人間とは思えなかった。

人でないからこそ分かる。あれは人間ではなかった。気づけば視界にあるあれらと変わらない、人間のふりをしてる虫だ。

そして、その環境の中心にいたのがライダーのマスターだった。

「——っ」

背後で扉が開く音がした。

入ってきたのは、生気の抜けた人形のような少女。ライダーのマ

スターである。

彼女はフラフラと覚束ない足取りで部屋の奥へと進んでいき、ようやく辿り着いた寝台にその身を沈めた。

「マスター、その……………」

マスターを気遣ってか、ライダーは声をかける。だがすぐに押し黙ってしまった。

その姿はあまりに儂く、脆く、かけた声の振動でさえ崩れてしまいそうだったからだ。

「…………ライダー」

「はい」

「一人にして」

「…………はい」

声を返されたことに驚いて返事をするも、続けられたのは拒絶の言葉だった。

ライダーは静かに姿を消し、霊体化したまま部屋を出る。

「—————」

マスターであるあの少女が、サーヴァントをつけず今までどこで何をしていたのか。ライダーはそれを知っている。

故に“何故”と思った。何故あれだけのことを、為すがままに受け入れているのか。受け入れられるのか。それがライダーにはわからなかった。

ただ人として、いや生き物としてその様はあまりに醜惡すぎる。それが彼女の癪に障ったのだ。同時にしてはいけないと、する権利すらも持っていないかと思いつながら、同情してしまった。

今こうしていても、あの妖怪のような面を思い出すだけで腹の中が煮えくり返りそうにいる。

「下種め」

吐き捨てるようについた悪態は、誰に聞かれるでもなく虫の鳴き声に掻き消されていった。

+

遠坂凜が行った召喚は見事なまでに完璧だった。

故に、どこに不備があったのか。本人にすらそれがわからなかった。何一つそんなものは存在しなかったはずなのに。

術式、魔力、諸々の下準備まで入念に確認し、最高の環境で召喚を行ったのだ。失敗なんてするはずない。

なのに結果はこう。ソレは目の前にいるはずなのに姿がなく、次の瞬間には家のほうから破壊的な爆音が聞こえた。

瞬時に“失敗した”と理解した。不備はない、なかったはずだった。

しかし、それはなんという皮肉か、失敗の原因は彼女の理解の外にあった。彼女は、ここ一番というところで必ずドジを踏むのだ。呪いじみた遺伝子は、ここにきててもその力を遺憾無く発揮してしまつたらしい。

「——なんでよー!？」

本人はまだそのことに気づいてはいない。

ただ上から突然聞こえた爆音の正体がわかってか、愕然と叫び地上に向かって駆け出す。

“やっぱり触媒なしの召喚は拙かったかな”と、今更になって後悔しながら、目ぼしい部屋扉の前まで走り抜けた。普通なら走る体力など残っていないはずなのに、彼女の魔力は底が知れない。

肩で息をしながら扉を睨みつけ、落ち着く間もなく扉に手をかけるが何かに引っかかっているのか開きそうにない。

「——ああもう、邪魔だこのおつ……!」

腕力ではどうしようもないと悟った彼女は、自分の家の扉を躊躇なく蹴り抜いた。

どっかーんという音と共に、勢いそのまま部屋の中に突進する。

「……………」

直後、目に入ってきたのはこれでもかというほど倒壊しきった居間。そしてそこら中に転がった瓦礫に座っている少女が一人。

「……………」

静かな部屋に規則正しく響く音に目をやると、そこでは彼女を咎めるよう無傷の柱時計が粛々と時間を刻んでいる。

そうして彼女は理解した。思い出してしまった。

遠坂凜がもつとも力が乗る時間は午前二時ジャスト。絶対に失敗できない召喚だからと、わざわざその時間に合わせて行つた。

だがその時計が、今日に限って一時間早かったのを『うつかり』忘れていた。つまり今の時間は午前二時ではなく、午前一時。

遠坂凜の絶好調までは、あと一時間も間があつた。

「……………また、やつちやつた」

自分の馬鹿さ加減が腹立たしかつた。

心の中で一人反省していると、瓦礫のほうからクスクスと喉を鳴らす音が聞こえてきた。

「なにを笑つてるのよ」

「ふふっ…いやね、ここまで乱暴な召喚をする魔術師が一体どんな人物かと思つて待つていたら、年端もいかない少女が現れたものだから少し納得してしまつたのだよ」

「ぐっ」

いきなり威厳が消え失せてしまった。

向こうにとつては家系がどうだのとかは関係ないのだから、最初の印象で実力のほどを図られるのは当然だろう。その最初を失敗しては、笑われるのも当たり前だ。

“本当に失敗した”と、今改めて自覚した。

「――」

それにしても、と凜は思う。

自分が今回召喚したのは、聖杯戦争と呼ばれる魔術師たちの競い合いのための使い魔。サーヴァントと呼ばれる英雄の霊だ。

カタチを持たぬものと考えていた凜だが、目の前にいる少女はどう見ても人間のそのものだった。

ただ、桁外れの魔力を帯びていることは判る。惑わされそうになるが、アレは間違いなく人間以上の存在であることは確かだ。

ならば、と凜は意気込む。頭を切り替えなければいけない。

いきなり嘗められたのだ。失ったものを取り返すのは容易ではないのだから。

「――確認するけど、貴女は私のサーヴァントで間違いない？」

「ふむ。どうだろう、むしろ私が聞きたいが。私は召喚というものが初めてのことだね、そのうえこれでは……正直なところ状況がよくわからない。」

互いが互いの主従なのか、確固とした証明があればいいのだけど、残念ながら私はこの身ひとつしか持ち合わせていない」

「私だって初めてだけど……なら、これでどう？」

右腕に浮き出た令呪を見せる。

令呪とは、人間以上の存在であるサーヴァントをマスターである魔術師が律することができる絶対命令権である。令呪がある限りサーヴァントはマスターに逆らえず、同時に主従関係を表す証しでもある。

サーヴァントであろう少女は差し出した右腕に浮かぶ令呪をまじまじと見つめ、ふむ、と腕を組んだ。

「確かに、君は私のマスターのようだな」

「ふう」

一安心する。とりあえず、目の前の少女がサーヴァントで、そのマスターが自分であることがわかった。

第一歩を豪快に踏み外して少しばかり不安が残るが、どうにか順調に進めそうだ。そう思ったのだが、

「よろしく——と言いたところだが、些か君には問題があるらしい」

「え？」

そう思ったのに、そのサーヴァントは早速問題を放り込んできた。整った顔と柔らかな微笑、そしてどこか辛辣な眼差しが凜を見つめる。

「どうも君は、魔術師としてもマスターとしても未熟なようだ。私は魔術師のランクなどは専門外だが、召喚にあたって刷り込まれた知識からすれば君はどうにも不安点が多すぎる。乱暴な召喚もそうだが、なにより君はまだ若い」

「なっ！」

「よって今後の方針は私に一任させてもらいたい。君に従わないとは言わないが、君の意見の多くはおそらく尊重することができないだろう。」

ああ、できるならば地下にでも隠れいてもらいたい。見ればこの

家の結界はそこそのものだ。ここに閉じこもっていれば、暗殺者のサーヴァントにも狙われる心配はないだろう」

「ちょ、ちよつと待って！」

あわてて待ったをかける凜。

しかし、少女の口は閉じることをしない。

「悪いがこればかりは譲れない。私もサーヴァントとして呼ばれたからには、マスターを勝利に導く義務がある。

君にこのような失敗を繰り返されて、万が一負けるようなことなどあつてはならない。これは、そのための最大の譲歩だ」

「――」

わかる。彼女は悪気があつて言っているのではない。それはわかる。

だが、それを差し引いても遠坂凜の沸点は低すぎた。

基本的に凜は、人の話を聞こうとせず勝手に判断する輩は得意ではない。このサーヴァントはその最たるものだった。

間が悪かったこともある。なにせ状況が状況だ。いつもなら軽く受け流せることでも、余裕を取り戻せていない今の凜にはそれも難しい。なにより――

「令呪だつて使えないのだろう？なら無理をして戦場に立つことは……！？」

これが決定打だった。

「なめるなあ――！！」

いいわ、そんなに言うなら使ってやろうじゃない！」

凜は、残り少ない魔力で右腕に浮く引き金を引いた。

「――セイント Anfang……！」

「え、なに、ちょっと……！」

「今更狼狽えてるんじゃないわよ！アンタだって人の話を聞かなかつたんだからお互い様でしょ！」

令呪に告げる

Vertrag………！――Ein neuer Nagel《

聖杯の規律に従い、》

――Ein neuer Gesetz《この者、我がサーヴァントに》

――Ein neuer Verbrechen《戒めの法を重ね  
給え》――！」

「な、うそ………！？待てマスター！そんなことに、貴重な令呪を………！」

「うるさい！」

いい、アンタは私のサーヴァント！従者が主の意見を無視して、勝手に話を進めようとするんじゃないわよ！」

凜の令呪が、マスターの意向を受け入れ光りだす。

たった三回しか許されない絶対命令権は、本人でさえ予想外のコトに使われようとしていた。

後悔しても後の祭りだ。令呪の光が辺りを包む。

一瞬置いて、桁外れの魔力を塊であるサーヴァントすらも瞬間的に凌駕する魔力の咆哮が周囲を飲み込んでいった――。

+

「——バゼット！」

サーヴァントは、遠く離れていてもパスが繋がっているマスターの危機を感知できるようになっている。それによって、ランサーがマスターの危機を感じ取ったのが数分前。

マスターの工房の扉を蹴破り、夥しい量の血の中に沈む女性の姿を見つけた。

伏している己がマスターに駆け寄るランサー。鬼気迫る形相で安否を確認すると、すでに手が施せないところまで来ていた。

間に合わない。

そう確信した時、部屋に巢食う闇の中から記憶に新しい声が聞こえた。

「戻ったかランサー」

「…貴様は、教会の神父」

聖杯戦争に参加するためと、魔術協会から派遣されたバゼットが

律儀にも昨日マスター登録しに訪れた教会にいた神父。  
名を言峰綺礼。今回の聖杯戦争の監督役として聖堂教会から派遣  
された元代行者である。

「……っ」

彼を睨むランサーの目に、ふと異物が映り込んだ。  
細く綺麗な白い何か。緩く折れ曲がった先から神父が持っている  
辺りまで布に包まれている。そう、どこかバゼットの服の色に似て  
いる気がした。

そしてさらに先、切断されている断面から滴り落ちる液体。それ  
は赤黒く、今しがたランサーが食してきたモノだった。

見た瞬間ではそれを理解できず、バゼットの体にあるはずの一部  
分が欠けていることに気が付きようやくそれを理解できた。

「貴様、それをどうした」

「ん。これか？バゼット・フラガ・マクレミッツの令呪だ。剥がさ  
れまいと抵抗するのでは、腕ごと切り取らせてもらった」

ランサーは馬鹿な、と思った。

バゼットは禁を破った魔術師に制裁を与えるために訓練された代  
行者である。元代行者が相手であろうと、そう易々とやられるはず  
はない。

おそらく神父は、何食わぬ顔でここに現れたのだろっ。そしてバ  
ゼットは、そんな神父を監督役だからと疑わなかった。そして向け  
てしまったのだ。確かに強いが、同時に女性らしく華奢であるそれ  
を。

「下種が、背中を狙ったな……！」

「御しやすいものだったのな。——さて、バゼット・フラガ・マクレミッツの令呪は私の手にある。

今やお前のマスターは彼女ではなく私だ。今後は私のサーヴァントとして役立つもらう」

見ると、切り取られた手にあるはずの令呪が、言峰の腕に移動している。

「——っ、ふざけるな！誰が貴様なんかに……！？」

ランサーの叫びを遮って、言峰の腕の令呪から光が発せられた。そう、言峰はすでにランサーのマスター。サーヴァントはマスターの持つ令呪によって律せられる。令呪が光を持つうちは、サーヴァントはどうあってもマスターには逆らえない。

「令呪によって命じる。主替えに賛同しろ、ランサー」

「がっ……ああ！」

令呪が発動され、しかしランサーはその命に抵抗してみせる。

わずか十日ばかりとはいえ、互いに認め合った相手を裏切れと命令されて頷けるはずはない。なによりランサーはバゼットのことを気に入っていた。

その彼女を裏切るなど、ランサーのプライドが許さなかった。だがサーヴァントにとって令呪は絶対だ。覆せるものではなく、ランサーとてそれは理解している。せめてもの抵抗である。

言峰は、令呪に抵抗して苦しんでいるランサーを嬉々として眺めていた。

「ほう、令呪に耐えるか。苦しむその様もまた一興だが、今は時間が惜しい。

——続けて命令する。全てのサーヴァントと戦い引き分ける。一度目は倒さず必ず生還しろ」

「あ……ああ……っ」

掠れる声は小さくなっていく。

令呪の内容は違えど、抵抗しようとするればそれは苦痛となる。結果、二つの令呪の苦痛に蝕まれた。

ひとつでも危ういのだ、ふたつめが重なれば抗うすべなどない。ランサーの抵抗は、命令という暴力によって叩き壊された。

「くっ」

言峰を睨む。抵抗は出来ないが、その瞳からはまだ反抗の意志は消えていない。

そして、言峰は怒りに歪むその顔を慈しむような目で見下していた。

運命は回りだす。

繋ぐ歯車が狂っていることは、まだ誰も知らない。

## Prologue / 1 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

それにしても、相変わらず構成がハチャメチャだ。文章力を上げなくては。

今回は色々実験的な意味を込めて載せさせてもらっています。頑張っ  
て続けられたらと思います。

長くなりました。ご意見感想はお気軽にどうぞ

## Prologue / 2 (前書き)

うっかりしてましたがプロローグは一応なるべく原作に沿っています。

## Prologue / 2

朝起きて居間に入ると、綺麗だった。

「うわ」

もう一度言おう、綺麗だった。

昨日は見当違いの場所にサーヴァントを召喚したために、廃墟と見間違っただけ倒壊していた居間から瓦礫がひとつ残らず消えていた。家具類も丁寧に整えられ、細工は判らないがぶち抜かれた天井も元通りになっている。

思わず感嘆の声を漏らしていると、記憶に新しい青い騎士が居間の奥から近づいてきた。

「起きたのか。よく眠れたかマスター？」

「え、ええ」

「む？ああ、これが。昨日の誤解のお詫びとして、マスターが眠っている間に片付けさせてもらった。」

まあ召喚の際の不手際とはいえ、壊したのは私だからお詫びというのは違うかもしれないが」

青い騎士——アーチャーは頬を掻きながら言った。

彼女が言う誤解というのは、私がまったく話を聞かないアーチャーに令呪を使った件だろう。もっとも、あれからすぐに誤解は解けたのだけだ。

アーチャーが問題と言っていた私の力不足は、アーチャーに掛けた令呪によって解消されたい。なんでも普通ならなんともない

はずの効果の薄い命令が、きちんと効果を發揮しているというのだ。  
“絶対服従”とまではいかなくとも、“原則服従”くらいにはなったとのこと。

召喚されたばかりで曖昧だったパスも繋がったところ、私をマスターと認めたアーチャーはこんなことを漏らした。

曰く――“いや、まったくもって申し訳ない。すべて私の早とちりだ。どうも私のコレは、死んでも治ることがなかったらしい”

どうやらアーチャーは、見かけによらずドジのようだ。なんか親近感。

「ずいぶん手馴れているのね。あれだけ散らかってたのに、一晩でこんな」

「うん。生前仲の良かった友人、というべきかな。その人がよく後先考えずに暴れることがあって、その後片付けを手伝っているうちに要領を得てしまったんだ。

酷い時は住居を二、三潰した、なんてこともあった。さすがに怒ったがな」

いい思い出だ、とアーチャーは楽しそうに話す。どんな思い出だ。

「あれ…アーチャー、自分のこと思い出せたの？」

「うん。それが大分いいところまでは来てるのだけど、肝心な部分がまだ思い出せない。名前とかな」

そうらしい。まあ徐々に思い出しているのだから、時間さえかければ大丈夫だろう。

「さてマスター。昨晚は休息を優先させたが、今ならば問題もない

だろう。

まだ済ませていないことを済ませてしまおうか」

「……済ませてないこと？」

「名前だよ。契約において、いやこれから共に戦っていく者同士、名前の交換は最も大事なことだ。

私はまだ、マスターの名前を聞いていなかったからな」

「……………」

堅い。けど、アーチャーのまっすぐな表情を見て、本当はいい娘なのだと思った。

薄々感じてはいたけど、間違いなくいいやつだ。

「——遠坂凛よ。よろしくねアーチャー」

「トオサカリン、リン…凛か。

うん、とてもいい名前だ。今後、私は君を凛と呼ぼう。こちらこそよろしく、凛」

+

『おお。聖杯からの知識で大方理解しているとはいえ、実際にこう

して見ると中々興味深いな』

霊体化しているアーチャーが嬉しそうに声を漏らす。

とはいえ口調はいつもと変わらない堅さだし聞き分けにくい、それがわかってしまったら妙に子供っぽく思えて笑ってしまう。

私は街を案内すると言って、アーチャーを連れて外に出ている。戦場となる場所をあらかじめ確認しておくのは、兵家として当然のことだ。

冬木市は、深山町と新都の二つの街で構成されている。より近代的なのが新都で、ビル群が立ち並びより都会的な雰囲気がある。

対照的に深山町は、地方都市らしく昔からの町並みを残している。私の家があるのもこっちだ。

この二つの街の間には川があり、それを繋ぐのが冬木大橋。一通り深山町を回った私たちはそれを渡り、新都へとやってきた。

人工的な街は、ここ十年で急速に築き上げられたものだ。

十年前、ここ一帯で大きな火事が起こった。住宅地はほぼ全焼し、焼け野原となった土地を利用してビルが建てられたという。

色々と回って行くところがなくなり、最後にやってきたのが新都にある公園。閑散としているのは当時の面影か、ここがその大火事を中心である。

「ここが新都の公園よ。主だった場所は歩いて回ったけど、感想は？」

最初は判りにくくてもあれだけ燥いでいたアーチャーは、ここに近づくにつれて少しずつ静かになっていった。きっと感じ取ったのだろう、この異質さを。

霊体化したアーチャーの姿はもちろん見えないが、とても真剣な表情が見て取れる気がする。

『——これほど広い公園なのに人気がないのは、何か訳でもあるのか』

「やっぱりわかるんださういうの。ま、ちょっとした曰くがね」

十年前ここで大火災が起こり焼け野原なつたと話すと、アーチャーは黙り込んでしまった。

…なるほど、アーチャーはもっと深くまで読み取ってしまったらしい。

「そしてここが、前回の聖杯戦争は決着の地というわけ」

『——そうか。酷いな、報われない者たちの怨念が、これほどにまで満ちている』

アーチャーの声には悲哀が入り混じっていた。  
よほど多くのものを感じ取ったのだろう。

「痛っ……！？」

唐突に、右腕が傷んだ。

『——凜？』

「しっ……黙ってアーチャー」

右腕に刻まれた令呪が傷む。

じくり、と。主に注意を呼びかけるような、鈍い警告。誰かに見られているようだ。

「誰かに見られてる……。移動するわ」

『いいのか、放っておいて。私が視線すら感じられないということ  
は、マスターではないのか』

「でしょうね。高位の術者なら自分の魔力くらい消せるだろうし、  
パツと調べて見つからないようじゃ探しても無意味でしょ。

だから誘き寄せるの。そうした方がこっちから出向く手間が省け  
るわ」

「……………」

呆れたのか、アーチャーは息をのんで黙り込んだ。続いて聞こえ  
たのは喉を鳴らして笑う声。

何がおかしいのか、我慢するような笑い声はしばらく止むことは  
なかった。

そんなアーチャーを無視しながら、新都を隅々まで歩き回る。移  
動中も、令呪の疼きは続いていた。

付きまとっている奴を振り回して、気づけばもう夜だ。夕食もさ  
つき済ませた。

散々歩き回って時刻は七時を過ぎた頃、私たちは新都で一番高い  
ビルの上で冬の木枯らしを梳いていた。見下ろす景色は壮観で、  
新都を一望できる。今日の締めくくりには相応しい。

「これは、素晴らしいな」

人目に付かないこの場所ならば、実体化しても問題はない。

月下のもとに姿を現したアーチャーの顔は、夜の街の全景を目に  
して圧倒されたのか少し惚けているようだ。

「これほどの場所があるなら、最初から連れてきてもらえばよかったよ。わざわざ歩き回る必要もなかった」

「何言ってるのよ。確かに見晴らしはいいけど、実際にその場に行かないと町の作りまではわからないわ」

「——いやそうでもない。千里眼ではないが、それに準じたスキルは持ち合わせているからな。」

ここからなら、そう……あの橋のタイルの数ぐらいなら数えられる。弓兵ということを考えると、目が良くなくてはやっていられないだろうからな」

「うそ……すごい、あなた本当にアーチャーなのね」

「見てくれがこうだからわかりにくいだろうけどな。この身は確かにアーチャーだよ、たとえ弓が使えなくてもね」

意味深な言葉を最後に、アーチャーは物思いに耽るように町を眺めた。地理を把握しようとしているのだろう。なら邪魔はできない。アーチャーから距離を取り、明るく照らされた地上を眺めた。私にはアーチャーのようにすぐれた視力はないから、ほとんどのものがぼやけて見える。

高層ビルからの俯瞰風景は、どこかここではない別の世界を思わせた。

そんなこんなで、昨日は散策から帰ってきてからすぐに体を休めた。

魔力はまだ十分ではなかったし、なにより少し疲れた。寝る前に監督役の綺礼に電話をかけて、用件だけ伝えた後すぐ電話を切つてそのまま眠った。

そうして朝。今後の方針をアーチャーに伝えたと、

『学校に行く、と?』

『ええ。何か問題あるかしら、アーチャー』

『立場的には問題はあるぞ!……いや立場的に問題はないのか……うん』

どっちだ。

『……言っても聞かないのだろうか?』

さすがアーチャー。一晩で私の性格を見抜いたらしい。遠坂凜は一度決めたことは覆さない、と。

私が頷くと、アーチャーは長く沈黙した後軽く息を吐いた。

『私はサーヴァントだ。マスターである凜の方針には従う。だが、私も霊体化して護衛をさせてもらっぞ』

『当たり前よ。学校に限った話じゃないわ、外に出るときは側にいてもらう。頼りにしてるわ』

そう言って家を出たのが三十分前。

私と霊体化したアーチャーは、たった今学校の正門をくぐった。

『む』

「どうかした、アーチャー？」

かすかに声を漏らしたアーチャー。私は前を見て歩きながら、周りに気づかれないように小さな声で訊いた。

アーチャーは虚空を仰いでいる。何かを探るように、ジッと眺めていた。

そうして少ししてから、

『いや。なんでもない、気のせいだ』

そう言った。

なんとなく気のせいではないんだろうなと思いながら、アーチャーが口にしないことなら私が気にしても仕方がないのだろうと問いただすことはしなかった。

授業というのは、意識して集中していると時間が経つのが早い。逆に早く終れと思ってぐーたらしていると、これが意外と長く感じる。勿論集中するのにはそれなりの忍耐とかが時たま必要になるが、

物心ついたところから魔術を学んでいる者たちからすればその難易度は一般人よりかは数段劣る。私もその一人だ。

まあ、それでも理解度が上がるといっわけじゃないし、優等生を演じるにはやはりそれなりの努力もいる。

昨日休んだ分を取り返すべくそれなりに勉学に励んでいれば、気づけば最後の授業も終わり周りは帰る支度を始めていた。

窓からは赤々とした夕日が差し込み、ホームルームが終われば生徒たちは次々と帰宅していく。

「……さて。夜もあるし、私たちも帰りましょアーチャー」

後ろにいるはずのアーチャーに呼びかける。返事はない。

それを肯定と受け取り、私は赤いコートを羽織って鞆を取り出口へと向かった。

だが、

「——アーチャー？」

さっきまでの付いてくる気配がない。振り返れば案の定、霊体化したままアーチャーはそこにいた。

正門の時と同じように、ジツと窓の外を見つめている。やはり、気になることがあるのだろうか。

「アー……」

『凜、調べたいことがある。申し訳ないが、少し付き合ってくれないか？』

「え、ええ」

呼びかけようとして、唐突に返されたアーチャーの提案に思わず頷いた。

『学校を見て回りたいんだ。なるべくならすべて』

「……気になることがあるのね」

『ああ。正門のところから感じていて気のせいかとも思ったが、やはりどうもきな臭い。』

一度調べておいて損はないはずだ』

アーチャーがここまで言うのだから、きっと本当になにかあるのだろう。私は校内を調べるため、もう私たち以外誰もいなくなった教室を出た。

「……………」

しかし、アーチャーが気になることというのはやはりマスターのことなのだろうか。

もし事実がそうなら、それは少し予想外の事態ということになる。この学校、確かに私を含めて魔術師は二人いるけど、もう一人はマスターになるだけの力はなかったはずだ。

ということは、私が知らない魔術師がこの学校にいてマスターとして聖杯戦争に参加しているのだ。そのマスターが、この学校に何かを仕掛けたということだろう。

「私のテリトリーで何をしたか知らないけど、やってくれるじゃない」

それから学校中を歩き回り、時計の針は八時を差そうかという頃、

殆どの場所を調べ終えて屋上へと出た。

外はすっかり闇に落ち、学校に残っているのは私とアーチャーだけ。

「これで全部よ。それで、何か分かったアーチャー？」

隣にいるはずの彼女に呼びかける。

するとアーチャーはしばらく思案するように黙り込んだ後、静かに話しはじめた。

『ここは、流れがおかしい。明らかに細工がされてある』

「……流れ。でも、私はなんにも感じられないけど」

『当然だろう。おそらくこれは、マスターではなくサーヴァントがやっていることだ。』

魔力は籠るが、これは魔術の領域ではない。なんらかの手が加えられている』

魔術の領域じゃない。なるほど、それならマスターが感づけるはずはない。

マスターは魔術師にしかねない。魔術以外の神秘は悉く専門外だ。

ただ魔力が絡むなら、そうとも限らない。それさえ判らないということは、確かに細工がされているということだろう。

「なんとかできる、アーチャー？」

『無理だな。これは判っていてもどうすることもできない。大本を叩く他ないな』

「その大本の見当はつく？」

『……………』

ないらしい。まあ、今回はその変化に気づけただけでも僥倖としよう。

下手をすると気づけなかったことなのだ。こういう情報は小さなことでも知っておいて損はない。それにしても。

「ねえアーチャー。さっきから貴女が言ってる流れって——」

「風の流れよ、人間」

唐突に。

私の言葉を遮り、アーチャーのものとは別の声が屋上に響いた。

「——！」

咄嗟に立ち上がり、声の方へと振り返る。

いた。給水塔の上。十メートルの距離を隔てた上空で、そいつは私を見下ろしていた。

夜の闇に浮かぶ紅い軽鎧と肩ほどまでの青髪。

幼すぎる容姿に、けれど決して童顔とは思えない表情は人間のものではない。

吊り上った口からは禍々しい八重歯が覗く。……いや、アレは牙だ。濃厚な血の匂いは、あの牙から漂っているに違いない。

齡十程にしか見えない紅身の少女は、この異様な状況において、私をどこか懐かしむような目で見つめている――

「――これ、貴女の仕業？」

「ふん。こんな面倒で無意味な小細工、私はしないし必要ないわ。この身はただ戦うためだけにここにある。命じられるのは癪だ、戦うことに異論はない。故に私はお前を喰うぞ、青いの」

「――！」

軽々と、しかし獰猛な笑みからはしっかりと殺意に満ちている。獣の眼光は、しっかりと私の隣を捉えていた。アーチャーが見えている……！

「やっぱり、サーヴァント……！」

「ふふ。さあて、その答えはそのお姉さんが知ってるんじゃない？」

少女の腕が上がる。

「――」

事は一瞬。

今まで何一つ握っていなかったその腕には――紅い、三メートルに届こうかという凶器があった。

瞬間、背筋に悪寒が走った。

「は、っ――！」

体が反応した。それに抗うことなく、狭苦しい屋上を全力で真横へ跳躍する。

——間一髪。

髪を舞い上げた旋風は、容赦なくフェンスごと直前まで私がいた空間を斬り払った。

「へえ、意外といい脚してるのね人間……！」

紅い旋風が追ってくる。退路はすでに断たれた。

ならば、迷っている暇などはない。

フェンスに手をかけ、勢いのまま一呼吸の内に飛び越え屋上から落下した。

「アーチャー、着地任せた……！」

風圧と重圧が体を絞る。ぐんぐんと地上が近づき、激突するといふ瞬間私の身体はふわりと速度を失った。

「——、は——！」

着地の衝撃をアーチャーに殺させて、地面に足がついたと同時に走り出す。

まだここでも不利だ。もっと自由に動き回れる広い場所。私とアーチャーの長所を生かせる、遮蔽物のないフィールドへ。

目指すは運動場。百メートル以上あるそこまで七秒足らずで走り抜けると——

「驚いたわ。もう少しかかるかと思ったけど、本当にいい脚ね」

そこに、私を襲った紅いサーヴァントがいた。

「アーチャー！」

私が後ろに引くのと同時に、前に出たアーチャーが実体化する。  
曇天の夜。アーチャーの手には、幽かな月光を反射させる一振りの刀があつた。

「へえ」

少女の口から牙が覗く。

「……ふふ。いいわねえ、あなた気に入ったわ」

「ごう、という旋風。」

それを起こしたのは、小さな身の丈には釣り合わない血で作られた真紅の槍。

それを見たアーチャーが、静かに声を漏らす。

「ランサー、か」

「ええそうよ。そういう貴女はセイバー……ではなさそうね」

「そういうお前もランサーらしくはないな。成り上がりか？」

「まあ、そんなところね」

青と赤のサーヴァントは、軽口を叩いているようで互いに牽制し合っている。

殺気はじわじわと肌を抉り、本能にまで警笛を鳴らさせようとし

てくる。

「……一騎打ちをするタイプでもなさそうだし、アーチャーかしら」

「ほう、よくわかったな」

「さっきその人間が言っていたじゃない。

まあいいわ。ほら、早く弓を出しなさいアーチャー。待ってあげるから」

「――」

アーチャーは動かない。もう話すこともないとばかりに黙り込んでいる。

弓を出そうともしないし、自然体で下げられた直刃の刀を引つ込めようともしない。

「――」

それで気づいた。

そうだ、アーチャーは私のサーヴァント。

戦うための呼ばれたものだが、だからこそこの一言は絶対に必要なのだ。

「アーチャー。手助けはしないわ。貴女の力、ここで見せて」

戦闘の許可を、アーチャーは待っていた。

一瞬の沈黙、それを突き破って青い騎士は疾走した。

その間、わずか五メートル。刹那の間も要らぬとばかりに、突風を上げながら青い弾丸は疾走する。

「——ククッ！」

迎え撃つは紅い槍突。

その穂先は神風となり、疾駆する突風に襲いかかった。

奔る刃、流す一撃。高速で突き出される槍の一撃を、アーチャーはすんでに刀で受け流す。

青い騎士はそれで止まった。敵はアーチャーの疾走を許さず、わずかにメートルの接近すらさせてはくれない。

三メートル近くある槍は、ただ突き出されるだけでも十分脅威となる。

ランサーはあれだけ小さくてもサーヴァントには変わらない。あれだけ長い槍を操れるのだから、払われた槍で横殴りにされるだけでも痛手だろう。

迂闊には近づくことすらできず、たとえ離れても突きの応酬によって動きを止められてしまう。

それゆえ長柄の武器は、常に距離を離して振るわれる。その長さがそのままアドバンテージとなり、敵が間合いに入る隙がなくなるからだ。

だというのに、ランサーは自ら距離を詰めてなおアーチャーに前進さえ許さなかった。

「愚かだな、弓兵<sup>ユウヘイ</sup>ごときが接近戦を臨むなど——！」

一体どこにそれほど力があるのか。

ランサーはその小さい体で、自身の二倍はあろうかという紅槍を巧みに操っていた。

気性は烈火のごとく、一撃ごとにランサーは進み、アーチャーは押し戻されていく。

長柄の武器にとって、間合いを詰めることは自殺行為に等しい。

槍の長所を生かし切れなくなるからだ。ランサーの勝機は前進するたびに薄れていく。にも関わらず。

「——なんで」

前進、前進、前進。まるで突き動かされるように、ランサーは前へ進むことをやめなかった。

だがそれだけではない。出される突きはどれも必殺。的確に急所ばかりを狙ってきていた。

残像さえ霞む高速の打突。

だがそれを凌ぎ、ランサーの槍もかくやという速度でアーチャーは踏み込んだ。その時点で突きでは間に合わない。

弓兵と甘く見たのだろう。払うに当たって、もうアーチャーは敵を間合いの中に入れてしまっている。あとは振り下ろすだけ。

「——」

「な、——！？」

青い騎士が停止する。

ありえない。アーチャーが踏み込んだ直後に彼女を狙った突きは、先の打突よりも高速だった。

軌道を逸らそうといなしにかかるアーチャーが、刀ごと弾かれる。際限なく上がる鋭さも威力も底を感じさせない。

そうして理解した。甘く見たのは私たちだ。

あそこにいるのはサーヴァント。槍兵の定石など存在するはずがない。

突きの豪雨は止むことを知らず、アーチャーはかろうじて後退し両者の距離はわずかに開いた。

だがそれでも、ランサーは前進し続けた。長柄の蹂躞は、自身のサーヴァントがピンチだというのに、思わず見惚れるほどに凄まじかった。

すでに十号。実際にはその何倍もの攻防が、今目の前で行われている。聖杯戦争の名に相応しく、まさしく戦争だった。

「――！」

一際高い剣戟。

ランサーの槍を弾いた刀は、そのままアーチャーの手から離れた。純粋な力技により、アーチャーの握力が耐え切れず弾け飛んだのだ。

「終わりだ」

打突が走る。

視認さえ許されない必殺の一撃が、アーチャーの急所へと迫った。だが。

「――！？」

アーチャーの手には再びあの刀が握られていた。

先ほどのと同じ、見事なまでに飾り気のない一振り。人切り包丁と呼ばれる日本刀が。

「……ふ、ふふ。剣士の真似事なんて、自分のクラスによほど不満があるのかしらね――！」

ランサーの槍が奔る。

響きあう二つの鋼。火花を散らす剣合は絶え間なく、際限なく速

度を上げていく。

一瞬の出来事だ。しかし見ている自分には、息が詰まるほどの時間は長いものだった。

両者の撃ち合いは百を超え、その度にアーチャーは武器を失う。だがそれも一瞬。次の瞬間にはアーチャーの手には刀があり、ランサーはその度にわずかに後退する。

事此处に至り、ランサーは自らの油断を認めたのだ。

目の前の相手が何者かは知らぬ。だが、弓兵とは侮れない。侮れば、敗北するのは己なのだと。

間合いが離れる。ランサーが撃ち合いから離脱し、距離を取ったのだ。

その速さは流石というべきか、最速のサーヴァントにふさわしく俊敏。柔らかく鋭い、しなやかな動きだった。

「……よくもそこまで出てくるものね。貴女、どこにそんな隠し持っているの？」

獣のような目つきと牙は相変わらずだが、アレは間違いなく困惑している。

けどそれも尤もな話だ。私だって同じ気持ち。

サーヴァントは本来武器を一つしか持たない。当然中には例外は存在するが、二十以上持つ英雄なんて私は知らない。

だというのにアーチャーは、まるで奇術のように次ら次へと取り出して使用している。

英雄を英雄足らしめるのは“宝具”の力だ。英雄であつたころの奥の手、サーヴァントにとっての唯一無二の武装が宝具である。代えがきかない文字通りの最終兵器。

ランサーのあの槍だって宝具のはずだ。その宝具と十分に撃ち合

っているのだから、アーチャーが今まで使って落としてきたあの刀も宝具には違いない。

だが、確かにあれはアーチャーの宝具ではないだろう。彼女はあくまでも弓兵であり、本来の宝具は弓でなければおかしい。

「なに、ちよつとした手品だよ。楽しんでいただけたならなによりだ」

「そのちよつとした手品であれだけの宝具を出せるなら、世の中の奇術師はさぞ協会とやらに重宝されるでしょうね」

アーチャーのはぐらかしに、ランサーは皮肉気に返した。

皮肉も言いたくなるだろう。アーチャーは剣士として戦い、ランサーは槍兵として戦ったのに仕留めきれなかったのだ。

アーチャーはまだ十全じゃない。確実に手の内を隠している状態だ。

「なら少し聞いてみようか。貴女どこの英雄？刀をポンポン出せる奇術使いの弓兵なんて聞いたことないけど」

「そついうお前は判りやすいな。

力任せで、けど本職の槍手にも劣らない槍捌き。血で固めたような長槍を持ち、幼い風貌に加えてその牙。私の知識の中ではおそらく一人」

「——まあ、ね」

途端。

死神にでも睨まれたか。直接向けられたわけでもない殺気に当てられ、そのあまりの巨大さに殺される幻覚を見た。

「正体が知れたなら、無理に隠す必要もないわね。私の名を知るということは、私に支配されるということよ」

「そうだな。私の答えが正しいなら、お前ほど性質の悪い槍兵は全ての歴史書を読み解いても三人としないだろう」

ランサーの槍が躍る。二人の会話を聞いて、あの槍の躍動する魔力を感じ取って悟った。

ランサーは、宝具を使おうとしている。

「――起源から終焉まで、その悉くを支配しよう。全ての運命は我が意の儘に」

命を仕留めることが誰かを支配することだというのなら、あの槍は間違いなく敵を支配できる。

今になってわかった。アレは槍なんかではない。槍の形をした、ある概念の象徴だ。

あの槍が奔ればアーチャーは死ぬ。直感でしかないが間違いはない。

「――、あ」

アーチャーは敗北する。

なのに、そこまで予知できているのに、私はアーチャーを助けることさえできない。指一本でも動かせば、あの槍が動き出すからだ。だがその時――

「――」

ランサーの視線が不自然に動いた。アーチャーを射殺さんばかりの殺意が籠った視線は、アーチャーからゆっくりと横に流れ校庭の脇の物陰へと向く。

それが自然界における捕食者の行動を思わせたのは、おそらく気のせいではない。視線だけで獲物を捕らえ、喰らい殺す捕食者の眼。

「ちっ……！」

そして次の瞬間、ランサーは一気に翻した身を視線の先へ奔らせた。

「——っ、待て！」

「……え？」

最初にランサーの姿が消え、それをアーチャーが追いかける。なにが起こったかわからず、私は突如聞こえた足音の方に目を向ける。その後ろ姿は、間違いなく学生服だった。

「生徒……！？まだ学校に残ってたの……！？」

ということとは、ランサーは生徒を追って行って、アーチャーはそのランサーを追って行ったのか。

魔術は隠匿すべきもの。それはすべての神秘に共通しており、サーヴァントも同じことだ。

見られたならば消す。それが魔術師のルールだ。

それが嫌なら目撃者を出さなければいいんだって、今までずっと守ってきたのに、なんだって今日に限ってこんな失敗を……！  
すぐさまアーチャーを追いかける。

二人の姿はおろか、逃げた生徒の姿ももう見えない。だが自分のサーヴァントの居場所ならば感知できる。

そうして校舎の中に入り、疼く令呪を頼りに探し回っていると、ひどく冷めた廊下に立ち尽くすアーチャーの姿を見つけた。

「アーチャー……っ」

近づいて、それを見つけた。床に倒れ伏した生徒の姿を。

「っ……………」

生徒を見下ろすアーチャーの顔は、苦悶に歪んでいる。即座に目撃者を消去しようとしたランサーとはあまりに対照的だ。

「……追って、アーチャー。ランサーはマスターの所に戻るはず。せめて相手の顔ぐらい把握しないと、割が合わない」

「——すまない」

ランサーを追っていくアーチャー。

最後の謝罪は、私に向けたのか、それともこの生徒に向けたものなのか。今は彼女しかわからない。

「……せめて」

責任に押しつぶされそうになる。

いや、いつかこうなるだろうとは思っていたのだ。私はこんな性格だから、自分の我儘でものをなくすなんて日常茶飯事だった。けどやはり、割り切れない自分はいた。

「せめて看取るくらいは、ね」

ごめん、と。一言呟いて、まだ息があることに少し驚きながら生徒の顔を確認した。

「――」

後ろに誰かいたのだろうか。

その顔を見た瞬間、後頭部をハンマーが何かでぶん殴られた気がした。

冗談だと思いたい。けど、紛れもなく真実だった。

なんだってよりによって……。

一番初めに思い浮かんだのは、後輩の顔。次いでわりと昔の放課後の風景だった。

そうして血の匂いによって現実に戻され、目の前にあったのはやつぱり巻き込まれた誰かの死体。

「間が悪かった、ただそれだけのことよ。だから――」

あらゆる思いを振り切って、死体一秒前みたいなヤツの前に跪いた。

「じゃ、じゃあ助けられたのか!？」

「一応ね」

生徒は助けた。よくて五分だったけど、上手くいったのは僥倖だ。おかげで父さんの形見を使い切ってしまった。遠坂で代々魔力を貯めてきた宝石、まさに切り札と言えるものだったけど。

まあ、高い授業料と思えばいい。それなりにいいものは見れたのだから。

サーヴァントの戦いを間近で見て、改めて聖杯戦争というものを実感できたのも確かだ。相応とは思えないが、この際妥協する。

「そうか……はあ」

「随分と気に掛けるのね。もっとサーヴァントって、ランサーみたいに神秘の秘匿には忠実だと思ってたけど」

今回のランサーの生徒殺し。これは私たち神秘に関わる者たちからすれば、十割ランサーが正しい。

アーチャーや私が止めようとしたのは道徳的な行動であって、魔術師からすればタブーに近い。

神秘とは隠匿してこそ意味がある。隠匿するからこそその神秘なのだ。それを目撃されたなら、排除するより他ない。

「いや、私は単に無関係な人殺しが好かないだけだよ。聖杯戦争のマスターたちのように覚悟を決めたものや、罪を犯し贖罪をせぬまま胡坐をかいているものに関して私は何も言わないがな。」

まあ確かに、私たちは秘匿され秘匿すべきものだ。けど、無暗に殺さなくてもやりようはある。そのための魔術だろう」

確かに、魔術によって記憶を操作できれば、わざわざ殺さなくてもいい。

だがそうすると、いくつかリスクが生まれることがある。術をかけられ記憶を弄っても、なんらかの拍子で術が解けてしまう場合がある。

それに、記憶操作なんて誰でもできるというわけじゃない。

結果的に、殺すほうが一番手っ取り早いのだ。足がつかないし、確実だろう。

「貴女、生前は苦労してそうね」

「まあ人間相手にこういうことはあまりなかったが、殺しても死ななそうなやつらばかりだったしな」

実際死ないやつもいたし、とアーチャーは何なしに爆弾発言を漏らした。うちのサーヴァントは不死と知り合いらしい。

「そうだ。朝も聞いたけど、もう思い出してもいいくらいじゃない？一晩で大分思い出せたなら、一日使って思い出せないってこともないでしょ。自分のこと」

「ああ。先の戦いがいい刺激になったのだろう、自分の名前や素性も思い出せた。まだどこか靄がかかっている感じはするが、そこも時間が経てば思い出すと思う」

アーチャーは難しい顔から一変、自然な微笑を浮かべて私に向き直った。

どうやら、ようやくこの青い騎士の正体を知ることができるらしい。これで不安がひとつ解消される。

正体が知れないままでは、これからの行動や作戦にも支障がでるだろうし。

ただそんな事務的な考えとはまた別に、個人的に彼女の正体を知るということに心が躍っていた。

「——そう。なら教えてアーチャー。貴女の正体を」

「ああ。私は——」

と。そこでアーチャーは黙り込んでしまった。なにやら考え込んでいるようだ。

「どうしたのよアーチャー」

「む、いや。少し気になってな」

「なにが？」

正直、途中で話を中断したことに少しだけ腹が立ったのは確かだ。だからこの時まで深く考えていなかったのは認めるし、完全に忘れていたのも私の責任だ。

ただアーチャーの言葉を聞いて、私はいつものように自分に呆れるしかなかった。

「——凜。君は助けた目撃者の記憶は処理したのか？」

またか、と。

十

「……へえ。魔術師だったのね」

深山町の和風住宅の並ぶ中、ひとつの日本屋敷の屋根の上に立つ  
紅い影があった。

幼い声で意外そうに漏らし、鋭い眼光が獲物を探し屋敷の中を縦  
横する。その口元からは、禍々しい牙が覗いていた。

「油断したわ、まさか結界が張ってあるとは思わなかった」

この屋敷に展開されている結界は、侵入者を察知するものだ。お  
そらく中にいる人物には、ここにこうしていることがばれているの  
だろう。

紅い騎士、ランサーは少し驚いていた。

まさか先のアーチャーとの戦闘の目撃者が、一般人と思いきや魔  
術師だったのだから。

さらに言えば、今こうして生きていることが。

「……殺したと、思っただけだね」

あの時、確実に心臓を貫いたはず。それなのに、どんな魔術を使ったのかは知らないがあの子は生きていた。

「まあいいわ。今度こそ迷わないよう、一撃で息の根を止めてあげる。けどその前に……」

ランサーの腕が上がり、突如紅い槍がその手の中に現れた。

獲物を狙うランサーの表情は恍惚として、口元が鋭利に吊り上り二本の牙が血を求めて疼き始めた。

「——食事も、済ませてしまおうかしらね」

血に塗れた紅い槍が振りあがる。

月下の下、紅い鬼は血を求めて獲物を狩り始めた。

## Prologue / 2 (後書き)

ここでプロローグ終わりにするかあと一話いれるかはまだ未定です。

## 運命の夜 動きだす影

——朝のことだ。とにかく今日はおかしかった。

家を出てすぐ桜に指摘されて気づいた手の痣。これは知らぬ間にどこかでぶつけでもしたのだろうと、その時にはあまり気にしなかった。

学校に入るとすぐ朝練がある桜と別れた。だが違和感を感じたのはもう少し前、正確には正門をくぐってすぐのことだ。

なんとも言えない不快感が全身を這うが、その正体がわからない。学校はいつも通りなのだ。生徒たちは生気に溢れて朝練に励み、真新しい校舎には汚れひとつない。

だが目を閉じるとそれも一変する。

なんというのか、空気が変だ。意思を持たない何かが、好き勝手に動き回っているような。否、その逆か。

何かに囚われた何かが、意思に反して操られているようなそんな感じが。そう、流れだ。はっきりとは分からないが、何かの流れが酷く歪に感じられる。

周りを見れば、そんなことに気づく様子もない。疲れてるだけかと思ひ、その時は何も考えず土曜日の短い授業を受けた。

そうして帰り、数人の女生徒と騒がしくしている慎二と鉢合わせ、暇だからということで弓道場の片付けを頼まれた。俺はそれを引き受け、一年半前まで使っていた道場を綺麗に掃除した。

——ここまでではよかった。問題はこの後だ。

突然物音が聞こえた。

校庭から聞こえる物音に興味を持ってしまった俺は、その真偽を確かめるためにそこへ向かってしまった。

そこにいたのは人。まだ距離があったため、俺は人の形をしてい

るだけのそれを人と判断した。

近づくにつれ音は大きく、より勢いを増して聞こえてくる。

これは鉄と鉄がぶつかり合う音だ。まさか、と思いその考えを苦笑いで否定して、無意識に物陰に隠れながらさらに足を進めていく。そこではつきりと音の発信源を見た瞬間——そこで、完全に意識が凍りついた。

さっきの馬鹿げた自分の考えが頭の中で反芻する。そこにいた青い少女と紅い少女は、本当に斬り合っていたのだ。

あまりに現実感のない光景を正常に処理しきれない脳は、しかし凶器の弾けあう音であの二人は殺し合っているのだということを理解した。

——死ぬ。

ただそれだけを本能が判断した。

ここにいたら死ぬし、逃げようと動けばそれだけで見つかって殺される。

あれだけ離れているのにすぐ後ろであの槍を突き付けられている気がして満足に息もできないでいたが、その斬り合いは唐突に終わりを告げる。両者は距離を取って向かい合ったまま立ち止まる。

……終わった。そう安堵した瞬間、自分の胸から槍が生える幻覚を視た。一瞬では理解できず、痛覚や込み上げてくる鉄の味まで鮮明なそれを幻覚と判断するには数瞬を要した。

心臓が委縮する。歯を食いしばって震えだしたくなる体を押さえつけ、再びその光景に目を向けた。

——心臓が弾け飛んだ。今度は本当にそうだったかと思うほどの衝撃だった。

——目が合ったのだ。これがどれほど恐ろしいことなのか、実際に見たものでなければわかるまい。

爆発したように血液が全身を巡り、本能が一心に一つの指令を体に飛ばす。気づけば足が勝手に走り出していた。

足が動かなくなるまで走ってついた先は学校の廊下。振り返って、

誰もいないのを確認し座り込むと、その少女は目の前にいた。

『お前は私の名前を知らない。お前がここで死ぬのは偏にお前の運の無さが故。あきらめなさいな』

振り下ろされる刃。避けることは適わず、為すがままに衛宮士郎の心臓を刺し貫いた。

込み上げてくる鉄の味は、今度は間違いなく本物だった。手足の先から感覚が消えていく。

この感覚は知っていた。十年たった今でも体に染みついているあの感覚。

ただ今は、それすらも溶けて消え始めていた。

『人を殺すのは食事の時だけ、そう決めていたのだけだね。けど恨まれるのは筋違いよ。もとより私はそういうモノだから』

そこから先はあまり思い出せない。

誰かが来て、何かをしたような気はしたけれどそれも曖昧だった。すべては昏い闇の中にいた俺を置いて通り過ぎて行った。ただ俺が生きているという事実だけを残して。

それから家に帰ってようやく落ち着くことができた俺は、自分が殺されて、それを誰かに助けられたと理解した。

おそらくはあの場にいた関係者なのだろうが、それも定かではない。お礼ぐらい言わせてもらいたかったと愚痴を垂れている中、屋敷の結界が反応したのはその直後のことだった。

そして状況は今に至る。俺は今、再び現れたあの紅い少女に襲われていた。

武器を得ようと強化をかけた急造の武器で何とか攻撃を凌ぎながら土蔵に入ったが、武器を探す間もなく少女の紅槍はぴったりと俺の心臓に向けられていた。

「詰みね。思いの外楽しめたわ。また抵抗されても面倒だし、食事はお前が死ぬまでに済ますことにする」

紅い閃光が奔る。

見切ることなど出来ず、俺の身体はただその凶刃のもとに曝されて二度目の死を迎えようとしていた。

抗うことなど出来ない。それが数時間前に体験していたことだとしても、抵抗する術も何も持ち合わせてはいない。

絶対の死を持って、その紅槍は俺の心臓を貫こうと迫った。

「——！？」

わずか数ミリ。迫る脅威は服と肉の間で止まった。いや、止められた。

突如として俺たちがいる土蔵から発した、眩いばかりの光によって。

「——本当に油断した。まさか魔術師だけでなく、マスターだったとは……！」

紅い悪魔は地面を蹴り、一度の跳躍で土蔵から距離を離れた。

土蔵に残ったのは、凶刃から必死に逃れ自身の工房に来たはずの俺と——収まった光の中にいた、月明かりを背に立つ翠の騎士だった。

「——」

その瞬間、変な少女に殺されかけていたという現実が、すっぱり俺の中から抜け落ちた。ただ目の前にいる存在に、俺というちっぽけな存在全てが引き込まれてしまったのだ。

人間じゃない。それだけしか判らない。それ以外に理解できるとすれば、その少女はあまりにも月が似合っているということか。

絶世の美女というわけではない。ただその姿が、驚くほどに人を魅了する魔力を帯びていただけ。大和撫子とは、まさに彼女のことを言うのだろう。

ただの美女ならば探せばいる。だが真に人を魅了する美を持つ者はそうはいない。

凜とした表情に鋭い眼差し、翠の和服に包まれた胸を張り流麗かつ堂々と月下に佇むその姿はもはやひとつの芸術だった。

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上しました。貴方が私のマスターですか？」

透明な、それでいてはつきりとした声が土蔵に響く。

「——っ」

途端、左手に痛みが走った。熱い、焼きこてを押されたような、そんな痛み。

思わず左手を抑えると、少女は静かに頷いた。

「——これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。契約は、ここに完了しました」

「な、契約って、なんの——！？」

契約。その言葉がどんなものは、半人前の俺でも理解できる。

だが少女は俺の問いになど答えず、頷いた時と同じ流麗さで顔を背けた。

「……」

唐突にセイバーと名乗った翠の少女が、土蔵の外へと視線を向ける。

切れ目はさらに鋭くなり、纏う空気には殺気が入り混じった。

「——サーヴァントを確認しました。迎え撃ちます、マスターはここに……！」

少女は駆け出すべくその場で屈み、古風な甲冑をガチャツ、と鳴らしながら土蔵を飛び出していった。

+

「——月もこんなに綺麗だし、今日はホント最高ね」

紅いサーヴァントは月下にその身を曝し、悠然と佇み土蔵から漏れる光を眺めていた。

その光も収まり数秒、殺気を纏いながら中から翠白の騎士が姿を現した。鋭い目が、ランサーを睨めつける。

「月が紅ければ、もっといいのだけれど……ね、セイバー？」

「――」

セイバーは眉をひそめた。目の前のサーヴァントに、自分はまだセイバーとは名乗っていない。

鎧を着ているとはいえ徒手空拳だ、見た目でセイバーと判断するには些か情報不足だろう。

「何故私をセイバーと思う、ランサー」

ランサーの腕には得物が握られている。地に柄を立て、月に届けとばかりのそれは二丈余りの紅い槍。ランサーと判断するのは正しい。

「さあ、なんでかしらね」

答える気はさらさらないらしい。それとも単に面倒なのか、余裕の笑みから牙を覗かせている。

「もとよりそんなことは関係ないわ、私たちはただ戦えばいいのだから。なにも考えず、この滾る血にすべてを任せればいい」

「……お前、本当にランサーか」

「この槍が見えないのか？ま、確かに狂戦士の資質も持ってはいるけどね」

長柄が地を離れ紅い槍が踊る。

それを見たセイバーが腕を上げると、黒塗りの鞘に収まった刀がその手に現れる。刀を抜き、鞘を背に回す。

セイバーは真半身に構え中腰に、切っ先を敵に向けた刀を顔の横へと持つてくる。

そのしつかりとしたセイバーの構えに対し、ランサーの構えは右手に持つ槍をダラリと下げたままのまさに自然体だった。

「さあ、大人しく……」

「その首、貰い受ける」

爆ぜる。

敵を仕留める必殺の凶弾となり、二体のサーヴァントは互いを目掛け疾走した。

空を切り裂き交わる刃。瞬きの間を交差した視線に殺意を乗せ、互いを弾いた鋼は衝撃を生んだ。

「――！」

止まったのは、ランサーだった。地面を踏み、前進する剣士を全力で突き返す。

それによって一瞬押したかと思われたセイバーの前進も止まった。互いに一進一退を許さず、突いてはいなされ、いなしては突かれるを繰り返す。

ランサーのスタイルは、言ってしまうえば超攻撃型である。相手に攻撃を許さず、防御の隙間を縫うような的確かつ必殺の突きを打ち込む。

いかに力のある英霊でも、この突きを半端な防御で迎え撃てば即

座に突き崩され心臓を穿たれて終わる。

先ほどアーチャーがこの打突に耐えられたのは、全能力を防御に回した結果である。アーチャーがランサーにあまり切り返しを仕掛けなかったのは、その隙がわずかしかなかったからである。

だが、セイバーは違った。セイバーは驚くべきことに、最初から全力でランサーを攻撃してきたのだ。

だからランサーは止まってしまった。意表を突かれたランサーは、初撃を交えた後そのまま続けて攻撃することができなかった。

結果的にランサーは正しかった。あのままさらに前進していれば、勢いそのままに間合いを侵食され一刀の下に両断されていたに違いない。

踏みとどまることで自身の間合いを保ちながら、セイバーの前進を食い止めることに成功していた。そしてセイバーは、一瞬でそれを判断し行動したランサーに驚きを隠せずにいる。

そうして切り込む隙を窺いながら撃ち合い、飛び散る火花が十二に届こうかという時、ランサーは突然大きく跳躍して後退した。

「ふふつ。どこぞの弓兵とはわけが違うわね。やはりお前が剣の騎士<sup>セイバ</sup>だった……」

ランサーの笑みに獰猛さが増す。

それは強者を得たた騎士の笑みか、それとも玩具を得た子供の笑みだったか。セイバーには知る由もない。

「けどそうなる残念ね。私は今十全じゃない」

「……………」

「ホントならあそこにいる人間を殺すついでに食事も済ませようと思っていたのに。間が悪かったわ。せめて疼きだす前に召喚されて

ほしかった」

「サーヴァントに食事は必要ない。お前がさっき言ったように、私たちは戦うためにここにいる」

「お堅いわねセイバー。言っただでしょ、気持ちの問題って。正直ね、一度衝動に駆られると気が散ってしょうがないのよ」

「何を言っているランサー——！？」

先ほどとは違う。ランサーが纏う気配がガラリと変わった。

あれは戦うものの闘気ではなく、捕食者の殺気。騎士では持ち得ない、まったくの別物。

その気に触れたセイバーは、目を大きく見開き、斬りつけたような鋭い目でランサーを睨んだ。

「——お前、槍兵ではないな！」

途端、電流のように殺気が奔った。ランサーからの威圧が異様に膨れ上がる。

心臓の弱い人間なら、これだけで卒倒ものだ。

「そう言う貴様こそ騎士ではないだろう、武士風情が西洋の甲冑を着こなせると思うな。その古ばけたその鎧で十分だ。だがな小娘、その身は確かにセイバーだろう。そしてこの身もランサーに他ならない。そんなことは些末事でしかないんだよ。それにな、いちいちそんなことを気にしているようでは器量が知れるぞ、セイバー」

「減らず口を……！」

セイバーが駆ける。もう一言もランサーの言葉を聞くつもりはない。

この場で切り捨て、その首を主に献上するのみ――

「――おい、お前！」

刃が交わる瞬間、セイバーの主は愚かにも戦場に足を踏み入れてしまった。

そちらに一瞬気を向けてしまった彼女には、捕食者の牙が光ったのは見えていない。

+

「――おい、お前！」

土蔵を出ていった少女を追いかけて飛び出すと、今まさにふたつの刃が交わろうとしていた。

耳を劈くほどの鉄の音が夜の庭に響き渡る。火花が散り、それが

消える前に繰り出された次の打突を翠の少女が刀でいなす。

確実に急所を突いている紅い少女の槍を、翠の少女は最小限の動きで全て逸らしきっていた。

俺にはどちらの動きも早すぎて視認ことができない。おそらくもう十何号も撃ち合っているのだろうが、俺が見て確認できたのはその半分にも至っていない。

紅い槍は打突の豪雨となり、翻る刃はその全てを打ち崩して進む。だがその度に突きの威力は増し、耐えかねた翠の少女は進んだ分だけの後退を余儀なくされた。

一進一退の攻防は、どちらも死力を尽くした攻撃の撃ち合い。そこに防御というものはなく、攻撃に次ぐ攻撃で互いは敵をいなし切り崩していた。

「――」

声が出ない。何をしているんだあいつらは。

血生臭いはずのその光景に思わず見惚れ、その中心にいる彼女を止めようと出てきたのに、俺の足は一步も動いてはくれなかった。

「――マスター！」

「――！？」

翠の少女が怒号を上げた。その間も、彼女の腕から先はブレていて見ることはできない。

「今は出てこないで！土蔵の中に戻っててください！」

翠の少女は敵に対応しながら、俺にそう叫んだ。

愚かとしか言いようがない。彼女ではなく俺のことだ。

初めから判っていたはずだ。この斬り合い、いや学校での斬り合いを見た瞬間から俺には到底手の及ばない事象であることが。

すなわち、これが俺のミスだった。アイツは悪くない。俺が土蔵から出てきたことがこのミスに繋がった。

少女の意識が僅かに俺に向かう——捕食者は、俺の姿を見た時からこの瞬間を狙っていたのだ。

「——戻れマスター……！！！」

翠の少女しか映っていない視界の隅で、何かが跳んだ気がした。次の瞬間、あれほど煩かった鉄の音が止み、少女が必死の形相で身を翻しこつちに走ってきた。

——“イタダキマス”

背筋に悪寒が走った。後ろに何かいる。そういえば、あの紅いのはどこにいった？

「うお!？」

彼女の手が俺に届き、体に不釣り合いな腕力で引つ張られ立ち位置が入れ替わる。

「——ぐ、うあああ!!!!」

「っ!？」

前のめりになりつつも、その絶叫に反応して咄嗟に振り返る。

悲鳴を上げたのは俺を引っ張って後ろに回った彼女。そして消えたはずの紅い少女もそこにいた。

「な、――」

目を疑った。紅い少女はその鋭利な牙を突き立て、翠の少女の白い首筋に後ろから噛み付いていたのだ。

腕を掴まれ身動きが取れない。それでも離れようとしているようだが、何故か何かに耐えるように震えるばかりで逃げようとしないう。おそらくあの牙に何かあるのだろう。

と。次の瞬間――

――“……ジュル、ル”

背中をナメクジにでも這われるような悪寒がした。紅い少女は血を、彼女の血を吸い上げている。それは、見るものを震え上がらせる化け物の所業だった。

「うあ……はあ、あ……っあああ、ああ！」

翠の少女が苦しそうに喘いだ。

吸血は続き、小さく水音を立てながら少しずつ吸われている。その様を蝙蝠みたいだと思ったのは、俺の気のせいではないはずだ。

やはりコレは人間ではない。

中世ヨーロッパに広くその名を残す化生。人の生き血を啜って生きる伝説の魔物。それが今、目の前に入る。

「グッ――――あああああ！！！」

「――！！」

渾身の力を振るい紅い少女を引っ剥がす。

不意を突かれた紅い少女は彼女の力に逆らうことなく放られ、その力を利用して後退した。

噛まれた首筋を抑えながら、倒れそうになる体をグッと堪えて紅い少女を睨む。

「吸血鬼……」

紅い少女の口角が吊り上る。赤々と光る牙が、すべてを物語っていた。

「吸血鬼の槍使いならば、御身はイングランドの紅魔卿……いや、その娘だな大紅！」  
スカレット

「ふふ、ご名答」

答えながら口元の血を拭う。紅い輕鎧には、遠目からも見て取れるほど血の斑点がいくつもできていた。

「もう少し飲みたかったけど、まあ文句は言えないわね。サーヴァントの血を飲めただけでも良しとするわ」

右腕が上がる。その手には、いつの間にか紅い槍が再び握られていた。

それを見た彼女も、首から手を離し刀を強く握り構える。露わになった噛み後からは未だに血が流れ出ていた。

「マスター、危険ですから下がってください！」

「なっ、馬鹿かお前！なら傷は治っていないんじゃないか！そんな状態でまだ続けようってのか！？」

何故そうまでして戦おうとする？大体なんで戦ってる？そもそもなんで俺は襲われたんだ？

色々な疑問が一気に押し寄せて、最早今関係ないことまで思い出してしまった。

心は焦るばかりで、怪我をした少女を助けることしか頭にない。それがこの場においてどんな正当性を持つのかさえ俺にはわからない。

だが、たとえ間違っているとしても、このまま傍観することだけはできなかった。

「——っ」

と。俺が彼女を引き留めていると、紅い少女が突然武器を下した。俺も少女もそれを見て訝しみ、遠くの空を睨む紅い少女を見据える。

そうして数瞬後、「ふんっ」と鼻を鳴らし俺たちに背を向けた。

「下種が……。勝負は預けるわセイバー」

「なに…逃げるのか、ランサー！」

「追ってくるなら勝手にしろ。言っておくが、もう貴様に対してこの忌まわしい令呪は働かない。次は貴様を殺すぞセイバー」

そう吐き捨てたランサーは大きく跳躍し、家の塀を飛び越えて夜に消えて行った。

「っ、待てランサー……！」

翠の少女は、逃げた敵を追おうとして走り出す。

「ば、馬鹿かアイツ……！」

全力で庭を横断する。急いで止めなければ飛び出して行ってしまう。

だが、その必要はなかった。

塀を飛び越えようとしたその少女は、跳ばうと腰を落とした途端、苦しげに首を押さえて立ち止まった。

傍らまで走り寄る。

少女の様は、まるで致命傷を負ったかのようだ。本来首を噛まれれば痛みはあるだろうが、ここまで苦しめるには至らないだろう。やはり、あの牙になにかあるのだろう。

「——なんで」

見た目は俺よりも年下。そんな少女が、なんで俺を庇ったのか。それもあるが、それ以前にこの少女が戦って傷を負っているのが、ひどく癪に障った。

と。それまで苦しそうに首に当てていた手を引き、少女は顔を上げてこちらを見据えた。

「……傷が、なくなってる……？」

さっきまで生々しく残っていた二つの噛み後が綺麗に消えていた。治療の魔術がある、とは聞いていたけど、魔術が行われた気配はなかった。

つまりコイツは、傷を受けようが勝手に治るという事。そう理解して、頭が切り替わった。

やはり人間じゃない。コイツは何かとんでもないヤツだ。正体が判らないまま気を許していい相手じゃない。

「——お前、何者だ」

半歩だけ後ろに下がって問う。

「え……何者、と言われましても、セイバーのサーヴァントです。

……えと、貴方が私を呼び出したのですよね」

そう訊いてくるセイバーは、さっきまでの態度とは打って変わってどこかあどけない感じが見られた。

「セイバーのサーヴァント……？」

コクツ、と頷く。さっきそこで戦っていた少女とは別人物かと思えるほど、その仕草は年相応だった。

「私のことは、今後セイバーとお呼びください。

どうやら正規のマスターではないようですが、それでも私のマスターには変わりはありません。警戒なされているようですが、私はマスターに危害を加えるようなことはしません。契約を交わした身、もとより私は貴方を裏切ることは出来ませんから。安心してください」

「う……?」

やばい。彼女が何を言っているのか聞き取れているくせにちんぷんかんぷんだ。判っているのは、彼女が俺のことをマスターなんて、とんでもない言葉で呼んでいることくらい。

「待て。俺はマスターなんて名前じゃない。俺は衛宮士郎だ」

「え、よろしいのですか?主人の名を口にして」

「いいから、よろしいから、許すから」

そんな言葉、こんな少女に呼ばせるなんて藤姉になんて言われるかわかったもんじゃない。

自分でも判る凄まじいくらいの役者不足だ。とりあえずそれだけは勘弁願いたい。

「では、士郎様と」

「っ……………!」

なんでさ。呼び方が変わっただけで役のでかさはまったく変わってない。

何故初対面の相手に様を付けるんだ、しかも苗字でもなく名前で!さらに、唐突にさっきの土蔵の光景が脳裏に甦ってきた。月光に照らされた流麗な少女の姿が。だが今でさえ、その淡い光に照らされなくともこの少女は綺麗だった。

無理だ。その少女に様づけなんかで呼ばれるわけにはいかない。

「痛っ……！」

反論しようとした途端、左手に痺れが走った。手の甲が熱い。左手には入れ墨のような、おかしい紋様が刻まれていた。

「それは令呪と呼ばれるものです士郎様。

私たちサーヴァントを利する三つの絶対命令権。マスターとしての命でもありますので、無闇な使用は——っ！」

言葉は途中で途切れ、セイバーは塀の外へと視線を向ける。

その顔にあどけなさが残っておらず、さっきまでの一振りの刀を思わせる気を纏っていた。

「士郎様、傷の治療をお願いします」

「え、悪いけどそんな難しい魔術は知らない。それに、もう治ってるじゃないか、それ」

セイバーはわずかに眉を寄せる。

俺は今、とんでもない間違いを口にしたらしい。

「……サーヴァントを確認しました。マスターはここに。この程度ならおそらく、数秒で済みます」

そう言っただけでセイバーは軽々と塀を越えて行った。

後に残った俺は、どこかで聞いた言葉を頭の中で反芻する。

“サーヴァントを確認した”

そのあと何が起こったか。それがどういったこと意味するのか、ここにきてやっと理解した。

セイバーの後を追った。門を飛び出し、物音のする方へと走る。

——それは一瞬の出来事だった。

見覚えのある青い少女とセイバーが対峙して、青い少女はセイバーに襲われて体勢を崩し一撃を受けようとしている。

人影は、その奥にいた。見間違うはずがない。間違いなく俺が知っている人物、ここにいるはずのない人物がそこにいた。

「止めるセイバー……！！！！！！！！！！」

左手の軽い痛みと共に、甲に刻まれた印がひとつだけ消えていく。本来止められない筈の一撃をセイバーは止めて、それを見た青い少女は即座に間合いを外した。

「なにをするんですか、士郎様！？今なら確実にアーチャーとそのマスターを倒せたというのに、みすみす勝機を逃すおつもりですか！」

そう言われたって、俺には未だ状況が理解できない。

俺は助けてくれた少女があいつを斬り殺す光景を見たくなかっただけだ。

「マスター、考え直してください！今こうして、マスターを一人倒せるのですよ！」

「セイバー待て、止めてくれ。正直俺には何がなんだか判らない。それでも——お前が襲いかかるうとしているヤツは、俺が知っているヤツなんだ。それを襲わせるなんてできない」

セイバーは息を飲む。

「……心中はお察しします。ですが、それでも彼女はアーチャーのマスター、私たちの敵なのです！ここで仕留めなければ——」

「——ふうん。つまりそういうコトなワケね。素人のマスターさん」

妙に丁寧で、そのくせ刺々しい声で、そいつは声をかけてきた。振り向き、思わず息をのむ。

そこにいたのは紛れもなく、見間違いようもなく——遠坂凜だった。

+

衛宮の家を出て少し移動した場所。紅い少女、ランサーはそこで立ち止まった。

すでに寝静まった家屋の屋根。そこで風を梳く彼女は、徐に腕を上げ手を上げて虚空を睨んだ。

「さて、私は覗き見とかいう下劣な行為は好きじゃない、したがってお前は万死に値するわ」

現界させた紅槍を電柱の頂上へと向ける。  
するとその空間が歪み、一人の少女が現れた。

「ランサー、会うのは二回目だったかしら？」

「ほう、先の戦いを忘れたというか。まあそうだろうな、逃げてばかりで一向に戦おうとしなかった臆病者だもの」

「職業柄、憶える必要のないことはすぐ忘れてしまうのよ私。ごめんなさいね」

悪びれる様子もなく、少女はランサーを見下す。

「そうか……なら思い出させてやろう、今度は足などではなく心臓を貫いてやる」

ランサーの殺気が色濃くなる。

少女は目を瞑り、一度ため息をついた後再び目を開けて、満面の作り笑顔でランサーを向けた。

「私は少し用事があつて出張つていただけです。

あなたたちを見つけたのも本当に偶然で、月もこんなに綺麗なことですし、手打ちということにはできませんか大紅卿スカーレット」

空気が割れた。殺気が魔力を巻き込んで形を為し、電流のように辺りを奔った。

ランサーは一瞬で電柱へと移動し、少女の心臓目掛け槍を振り下ろす。

「——っ」

……が、そこにはすでに誰もいなかった。

彼女が消えた後の電柱に着地し、カラン、という音を聞き振り返ると、さっきまでランサーがいた屋根の上にその少女がいた。

困った時の口癖の後に「失敗、失敗。名前はダメなのでしたね」と、少女は舌を出しながら言った。

ランサーが毛嫌いするのも頷ける。

死合いこそが目的のランサーにとって、戦おうともせず逃げるだけの敵は苛立たしいことこの上ないだろう。そして少女もそれを理解しているから、こうしてランサーをからかうのだ。

ランサーとて本気を出しているわけではない。それこそ宝具でも使えば、あの少女は簡単に殺せるだろう。

「……」

だがランサーはそれをしない。

宝具の使用にはどうやっても数瞬の間が生じ、その間にでも少女はランサーの宝具の射程外へ逃げ遂せてしまう。

最速と名高いランサーから易々と逃げ切れるだけの力を、彼女——ライダーのサーヴァントは持ち合わせているのだ。

現にランサーは一度ライダーと戦い、一合も合わせることなく逃げられている。その時に穂先が足を掠めたが、もうその傷も治っているはずだ。

だが、同じ失態をするつもりもランサーには毛頭ない。

「そうだな、やはりここで仕留めるといい。お前の言うように、月もこんなに綺麗だからな。今度は逃がさない」

「……………」

互いに睨み合う。

ランサーは紅槍に魔力を込め、ライダーはそれを為すがままに見届ける。

二人とも次の瞬間には動き出せる態勢で動き出す機会を窺う。

緊張の糸が極限まで張りつめられ、今まさに切れようとしたその時――

「――！？」

ゾクツ、と。言い知れぬ悪寒が奔った。

ランサーは辺りを見回す。そこにあるのは寝静まった闇ばかりで、どこにも探し求める姿はない。

いや、そんなはずはない。これほどにまで身を震わす殺気だ。近くにはいないはずはない。

しかし、それでもランサーが求めているものは見つけれなかった。

感じ取った殺気も、一度きりでなりを潜めている。

「今の気は、まさか……っ、ライダー！？」

その殺気に気を取られている隙を突かれた。すぐ隣で、桁外れに強大な魔力の奔流が起こる。

間違いなく、それは宝具だった。

「ヤバイのが動き出したみたいだから、早々に立ち去るとするわ。収穫もあったしね」

光の屈折さえも歪ませる膨大な魔力が暴れ回る。

足場の悪いランサーはそこで堪えて、事が済むのを待つしかない。

「貴女が宝具を使うなんて、よっぽどそいつはやばいのね」

戦闘をやめたためか、ランサーの口調が穏やかになる。

「ええ、あんな歩く災害みたいな相手にしてらんないもの。じゃあねランサー、運悪くあいつにつかまって死んでくれればありがたいわ。その前に、これに当たらなければだけど――」

「――！？」

咄嗟の判断で、ランサーは全力で横に跳んだ。

その刹那、人の大きさに凝縮された台風が一瞬で通り過ぎて行つた。振り返ればもうそこにライダーの影はなく、破壊的な傷跡が一直線に残っている。

まるで巨大なレーザー砲が住宅地の僅かに上を掠めてしまったような光景だった。

「……？」

暗くて判りにくい、何かが揺れながら落ちてきていた。

ランサーは手を掲げそれを掴み、マジマジと見つめてから黒いそれを頬に当てた。

「なるほど。となるとアレの正体は……。ふうん、私が言うのもないんだけど、また随分と珍しいのが呼ばれたものね」

そう言つとランサーは、吹き抜ける風にそれを乗せた。

空へと運ばれていくそれは、文字通りただの魔力となり闇へと溶けていった。

運命の夜 動きだす影 (後書き)

思いのほか難しいFateクロス。

なかなか文章と展開が独立できないのが難点。

もっとオリジナル要素をだせるよう頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4040q/>

---

Fate/fantasy volost

2011年10月9日17時27分発行